

中学生にとっての「英語」とは ——他教科との比較でみる英語学習の特徴

Benesse 教育研究開発センター主任研究員
木村 治生

中学生にとって「英語」とは、どのような存在なのだろうか。「英語」に対してどのような意識を抱き、どのように学習しているのだろうか。本稿では、Benesse 教育研究開発センターが行っている他の調査結果を援用して、他の教科に対する意識や学習との違いを確認する。そのなかで、中学生にとって「英語」がどのような存在なのかについて検討してみたい。

1 はじめに

本調査（「生徒調査」）の結果からも、中学生にとって「英語」とはどのような存在なのかということの答えをいくつかみつけることができる。たとえば、授業の理解度については、「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」の合計が40.6%しかおらず、おおむね満足できる程度まで理解している生徒が多数であるとはいえそうもない。また、英語が得意かどうかをたずねた質問でも、「とても得意」と「やや得意」の合計は37.5%で、「とても苦手」や「やや苦手」と回答した61.8%よりもかなり少ない。中学2年生の段階で、6割が苦手意識をもっているという結果だ。さらに、9教科のなかから「好き」と思う教科をすべて選んでもらう質問では、「英語」は「国語」に次いで低く、25.5%の生徒しか選択しなかった。これらの結果から全体として、英語学習をあまり好んでいない中学生の様子がみてとれる。

ただ、今回の調査では、他教科と比較したときの英語の位置づけについては「好き」な教科を選択してもらった質問からわかるだけ

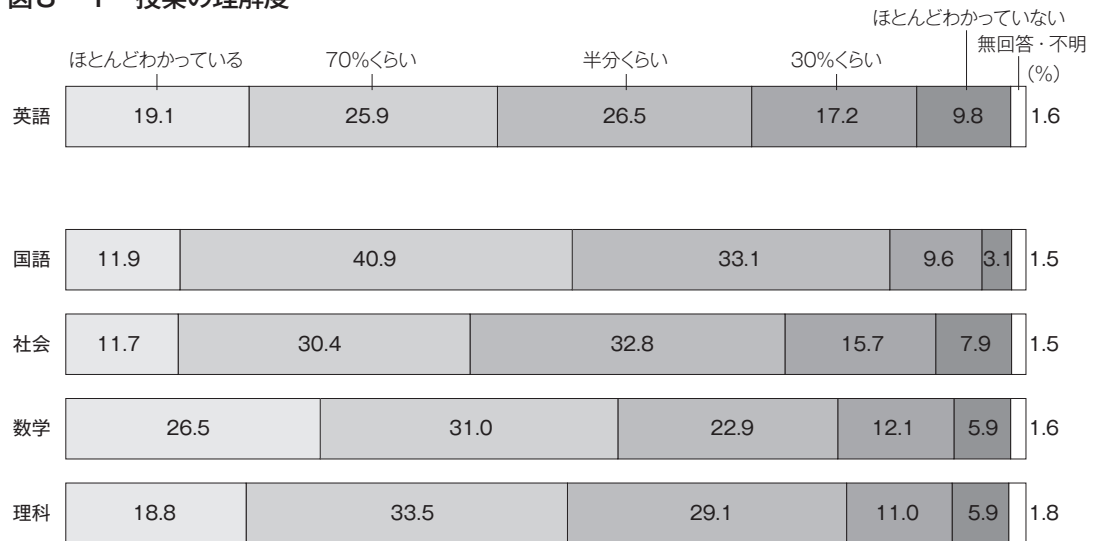
で、十分に踏み込むことができていない。もしかしたら、授業の理解度が低いことや苦手意識が強いことは、英語に限らないものなのかもしれない。中学生になると、どの教科でも難易度が高まり、進度も速まる。勉強が嫌いだという思いは、英語に限らないという可能性も高い。

そこで、主に「学習基本調査」（第4回調査を2006年に実施）の結果をもとに、「英語」と他の教科との関連をみながら、中学生にとっての「英語」についてみていこう。

2 授業がわからない生徒が多い

最初に、授業の理解度から確認しよう。取り上げるのは、今回の調査と同じ中学2年生を対象とした「学習基本調査（中学生版）」である。この調査でも、学校の授業の理解度について「ほとんどわかっている」「70%くらい（わかっている）」「半分くらい（わかっている）」「30%くらい（わかっている）」「ほとんどわかっていない」の5つの選択肢から、あてはまるものを選んでもらった。その結果を示したの

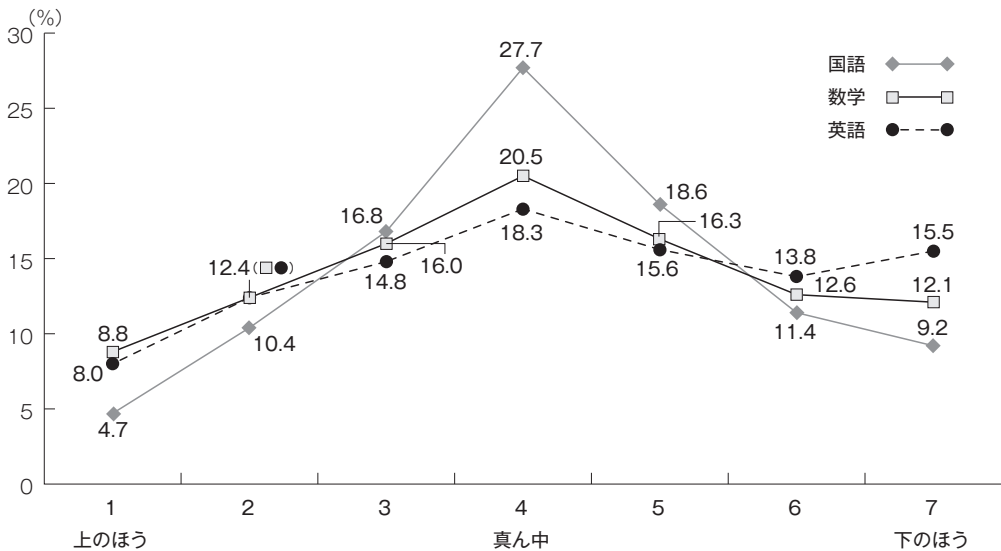
図8-1 授業の理解度



注1) Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」(2006年実施)より作成。

注2) サンプル数は、2,371人。

図8-2 成績の認知



注1) Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」(2006年実施)より作成。

注2) 「次の教科の現在の成績は、学年の中でどのくらいですか」という質問に対する回答 (n=2,371)。

注3) 無回答・不明は省略した。

が、図8-1である。

ここからは、他の教科と比べて英語の授業理解度が低めであることがわかる。第一に、英語は「ほとんどわかっていない」と「30%くらい(わかっている)」の合計が27.0%と、他の教科に比べて高い。授業についていけない生徒が、4人に1人程度いるという結果で

ある。第二に、「ほとんどわかっている」と「70%くらい(わかっている)」の合計は45.0%で、社会に次いで低い。他の教科との比較においても、英語は理解度が高い生徒が少ない傾向があるようだ。

それでは、理解度は男女によってどのように異なるのだろうか。「ほとんどわかっている」

と「70%くらい（わかっている）」の合計は、男子が45.4%、女子が44.7%であり、ほとんど違いはみられなかった。ちなみに他教科では、男子・女子の順に、国語49.7%・56.1%、社会48.6%・35.5%、数学64.8%・50.3%、理科59.8%・44.6%である。国語、社会、数学、理科の4教科は性差が大きく、英語は性差が小さいというのが特徴である。

図8-2は、成績の認知についてのデータを示した。結果は、授業の理解度とほぼ同様である。国語は、「4：真ん中」という回答が多く、「1：上のほう」や「7：下のほう」といった回答が少ない。生徒にとって、自分ができるほうなのかどうかの判断がつきにくく、中央が高い分布である。数学は国語に比べて、分布の山が低くなり、分散が大きくなっている。国語よりも「できる／できない」といった認識をもちやすい教科であることがわかる。英語は、数学に近い分布である。ただし、「7：下のほう」という回答が多く、自分は成績が低いと認知している生徒が、国語や数学よりも多い特徴が表れている。

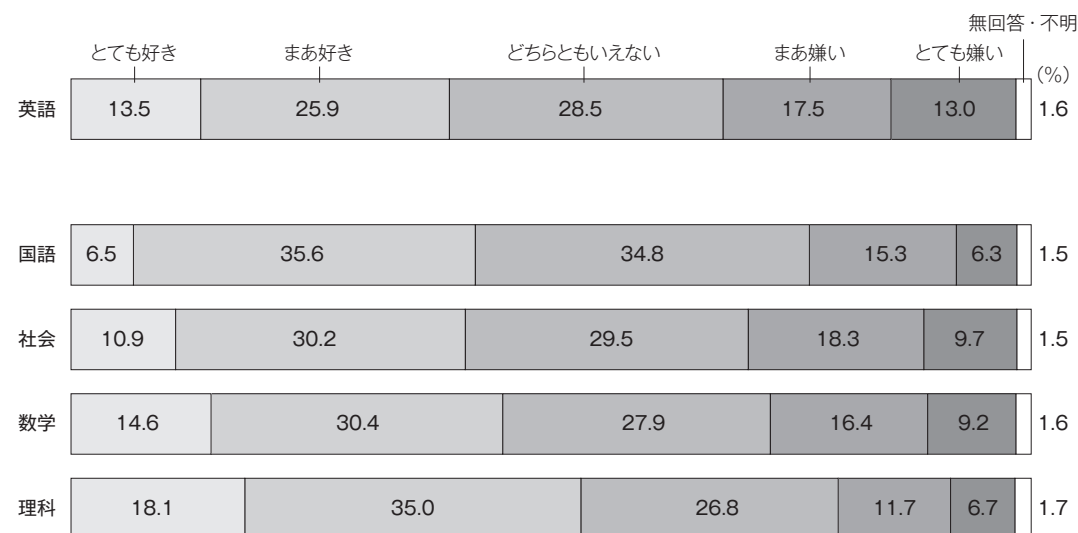
図8-1、2より、英語は他の教科と比べると、理解度が低い生徒、成績を低く認知している生徒が多い。このことから、そのような成績下位層の生徒をどう指導するかが、重要なポイントとなる教科だといえることができる。

3 嫌いな生徒が多い

つづけて、その教科が好きか嫌いかをたずねた結果から、生徒が英語をどのように認識しているかを検討しよう。図8-3をみると、英語はやはり「嫌い」という回答が多いことがわかる。「とても嫌い」と「まあ嫌い」の合計は、英語30.5%>社会28.0%>数学25.6%>国語21.6%>理科18.4%の順である。英語はとくに、「とても嫌い」という回答が多い。データを引用した「学習基本調査」（第4回調査）は夏休み前の6～7月に実施しているが、中学2年生の1学期の段階で英語嫌いが3割を占めるという結果だ。

これは、本調査（「生徒調査」）の結果とも符合している。本調査では、英語が「苦手（と

図8-3 教科の好き嫌い



注) Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」（2006年実施）より作成。

でも+やや)」と回答した6割の生徒に対して苦手と感じるようになった時期をたずねているが、そのうちの8割弱が2年生になるよりも前の時期を選択している（図表省略）。中学1年生の段階で英語嫌いは増えていき、中学2年生の前半には「嫌い」と回答する生徒がもっとも多い教科になる。この点では、1年生のうちに「嫌い」を増やさないことが英語の指導に求められるといえそうだ。

ところで、英語は授業の理解度の性差がほとんどみられなかったが、好き嫌いについてはどうか。「とても好き」と「まあ好き」の合計は、男子が36.6%であるのに対して、女子は42.5%である。5.9ポイントほど女子が高く、どちらかというとな女子のほうが英語を好んでいるという結果になった。他教科では、男子・女子の順に、国語34.7%・50.0%、社会47.1%・34.6%、数学51.6%・37.9%、理科62.8%・43.1%である。国語は女子に好まれており、15.3ポイントの差がある。一方、社会、数学、理科は男子に好まれており、それぞれ12.5ポイント、13.7ポイント、19.7ポイントの

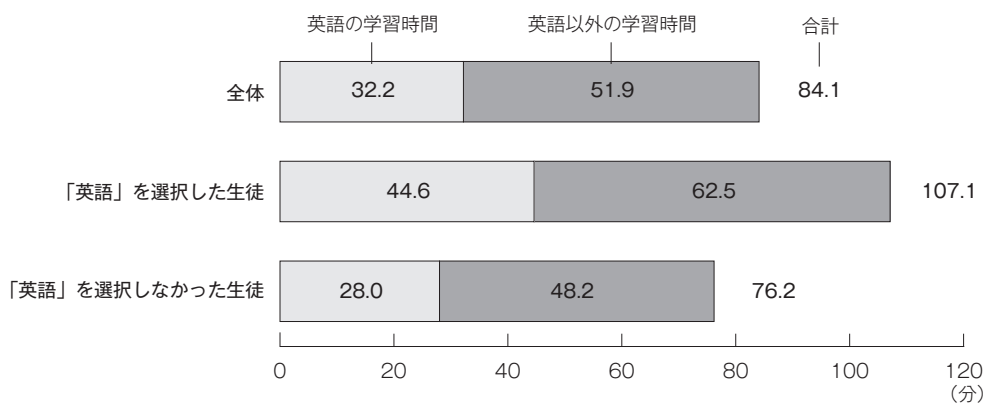
差である。このように、男子に好まれる教科と女子に好まれる教科に二分される結果にはなったが、英語は他の教科と比べて性差が小さい印象を受ける。

4 英語好きは英語をたくさん勉強

それでは、今まで述べてきたような意識は、学習行動とどのような関連をもっているのだろうか。ここでは、本調査（「生徒調査」）の結果から、意識と行動の関連を探っていきたい。

図8-4は、好きな教科を選択してもらった質問において英語を選択した生徒としなかった生徒にわけて、学校外での学習時間の平均値を示したものである。学習時間は、1日の合計の学習時間と英語の学習時間をたずねている。全体では1日84.1分の学習をし、そのうち32.2分を英語にあてている。全体に占める英語の学習時間は、38.3%である。4割弱を英語学習にあてており、他に多くの教科があることを考慮すると、中学生は英語を重視しているといえそうである。

図8-4 学習時間（英語の好き嫌い別）



注1) 学習時間は、「ほとんどしない」を0分、「およそ30分」を30分のように時間に換算して平均値を算出した。

注2) 英語以外の学習時間は、合計の学習時間から英語の学習時間を引いたものである。

次に、好きな教科として英語を選択した生徒としなかった生徒の違いをみてみよう。選択した生徒は、107.1分と長時間の学習をしており、そのうち英語も44.6分と長い。全体に占める英語学習の割合は41.7%で、英語を好んで学習していることがわかる。これに対して、英語を選択しなかった生徒は、合計の学習時間が76.2分と短めである。英語を選択した生徒と比べると30分程度も短い。さらに、英語学習の時間は28.0分であり、30分を切る。全体に占める英語学習の割合は36.7%であり、相対的に低い。

好きな教科として英語を選択した生徒は、長い学習時間のなかで多くの割合を英語学習に費やしている。これに対して、英語を選択しなかった生徒は、もともと短めの学習時間であるうえに、英語学習に割く割合も小さい。因果関係は明確でないものの、この結果は、「好き」という認識と学習行動に一定の関連があることを示している。当然のことだが、学習行動を促進するために、「好き」という認識をいかに高めていくかが重要である。「嫌い」な生徒が多い英語は、その認知を変えていくことがとくに重要な教科だといえるだろう。

5 英語への関心が高い女子

最後に、各教科の学習に対してどのように感じているかたずねた結果を紹介しよう。データは再び、先行調査（「学習基本調査」）から引用する。

図8-5は、「勉強していて、次のように感じることがありますか」という質問に対して肯定した比率を示している（「よくある」と「時々ある」の合計）。それぞれの教科についてたずねているが、英語に関する項目（「英語を使って外国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい」）の肯定率がもっとも低い。他の教科に比べて、英語にかかわる意欲が低いとみることもできる。しかし、他教科は日ごろの実感を聞いているのに対して、英語の質問は外国人との交流について聞いており、中

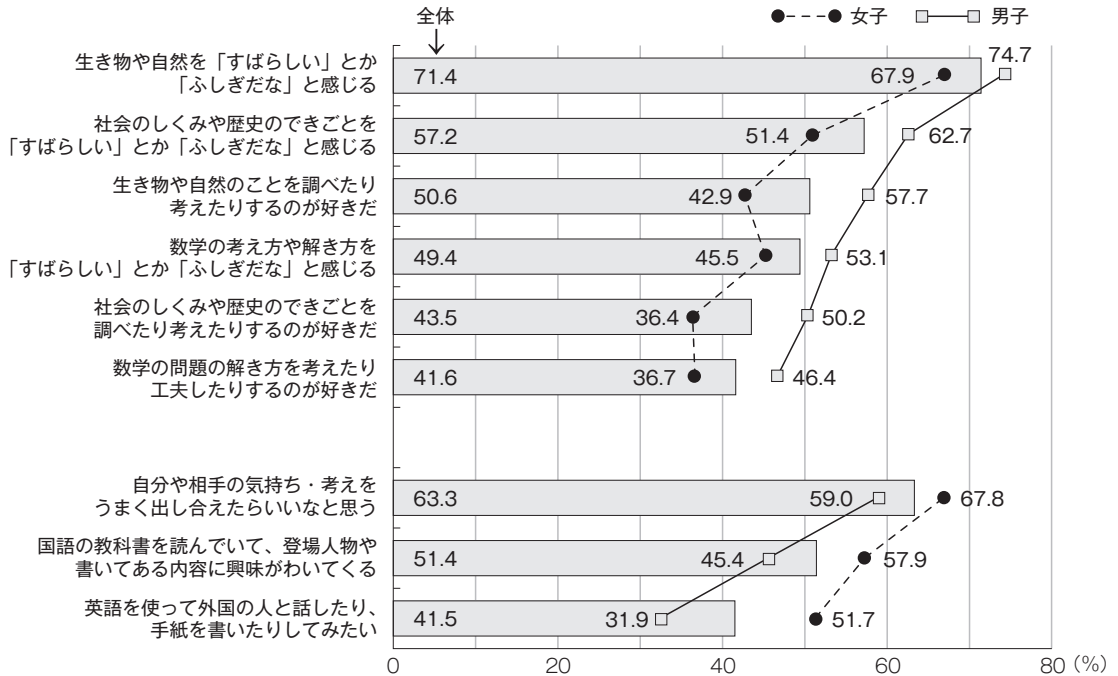
学生にとってはハードルが高い行動に対する意欲を問うていると思われる。このため、数値が低いからといって、単純に英語にかかわる意欲が低いと断定することは難しい。

ここで注目したいのは、性差である。国語に関する質問は女子の肯定率が、社会、数学、理科に関する質問は男子の肯定率が高い。このように教科によって関心や意欲には性差がみられるが、そのなかでもっとも大きな差が開いているのは、英語に関する項目である。「英語を使って外国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい」の肯定率は、男子が31.9%であるのに対して、女子は51.7%であり、20ポイント近い差がある。他者とのコミュニケーションに積極的かどうかという問題と重なって、とくに英語は女子が高い関心をもつ教科だといえるのではないか。

そこで、本調査でも、その点を検証してみた。図8-6からわかるように、1項目を除いて、異文化への関心については女子のほうが数値が高い。とりわけ、「英語を使って外国の人と話してみたい」（14.4ポイント差）、「外国の人と友だちになりたい」（12.7ポイント差）の2項目は違いが大きく、女子は外国人とのコミュニケーションにかかわる関心や意欲が顕著であることがわかる。こうした積極性は、英語の好き嫌いにも関係していると考えられる。

しかし、図には、男子にも関心を高める手がかりが示されている。唯一であるが、「外国の有名人やスポーツ選手に関心がある」では男子のほうが肯定率が高い。男子はもともとスポーツに対する関心が高い。そうした最初からもっている他領域の関心を利用すれば、男子が抱く英語への関心をもっと高めることができるのではないだろうか。前述したように、英語好きはたくさん英語を勉強する傾向があった。生徒を英語好きにするためにも、まずは英語に対する関心を高めることである。そのために、生徒がどのようなことに興味をもっているかを考慮して、学習の素材を工夫することが求められるといえるだろう。

図8-5 学習していて感じること

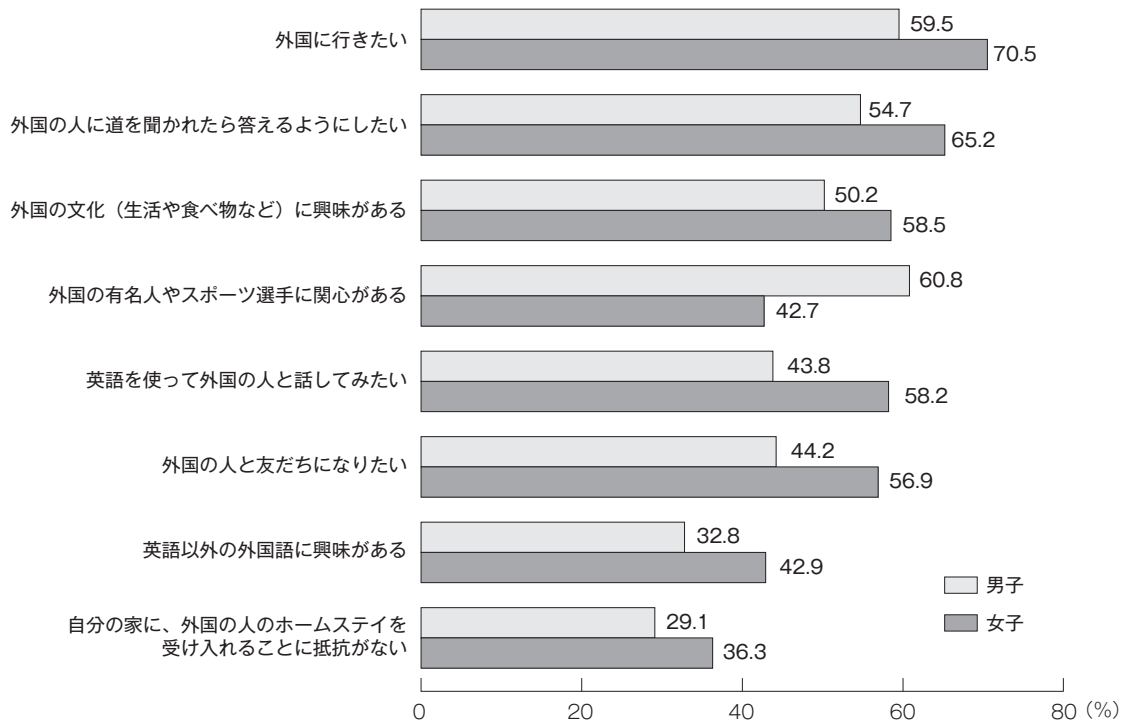


注1) Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」(2006年実施)より作成。

注2) 「よくある」と「時々ある」の%。

注3) サンプル数は、全体2,371人、男子1,210人、女子1,151人。

図8-6 異文化への関心



注1) 「とてもそう」と「まあそう」の%。

注2) サンプル数は、男子1,576人、女子1,384人。